


南総里見八犬伝 悪女コレクション

(椿説弓張月からのオマケつき)

玉梓
亀篠
黒白
船虫
夏引
嗚呼善
妙椿
於兔子
中婦君 (ゲスト)



八犬士なんて
目じゃねーよ！

山本て

■はじめに

南総里見八犬伝の全話ダイジェストを14ヶ月くらいかけて書いてみたことがあります。なかなか面白くて、手っ取り早くお話のあらすじを掴むことができる文章が書けたな、と思つています。長すぎて簡単に印刷・頒布はできませんが、小説投稿サイト「カクヨム」で読める状態ですので、本冊子を読んで興味をおぼえられた方は、ぜひオンラインで読んでみてください。

これだけ長くてたくさん要素が満載のお話ですから、特定の事柄だけに注目してもそれだけで一個の物語が成り立つたりします。里見義実よしざねだけとか、犬士だけとか、関東管領かんれいだけとか。今回、小冊子におさまる程度の文章になる切り口はないかな、と考えてみて、「悪女で行つてみようかな」と思い立ちました。

里見八犬伝には何人もの悪人が出てきて、物語の性質上、ことごとく滅んでいきます。それらの中でも特にキャラクターが立っていたのは、女性の悪人キャラのような気がします。全力でわるさをして、暴れて、そして滅んでいくのは、いつそイキイキして清々しい

なあ、と思うほどです。

というわけですので、かつて誰かがやったことがあるのかも知れませんが、『里見八犬伝・悪女コレクシヨン』として、代表的な（ちよっとマイナーなものも入っています）悪女キャラを、自分なりに順々に紹介してみることになりました。

■玉梓たまづき

里見八犬伝の悪役女性といえ、まずこの玉梓たまづきを外すわけにはいきません。彼女のおかげで里見家は呪われ、八犬士の長大な物語がスタートするわけですから。彼女がどの出身かは分かりませんが、お話の中では、安房の平群へぐりの領主である神余光弘じんよみつひろの側室として登場します。玉梓たまづきはその色香で領主の一番のお気に入りとなり、神余じんよはそれに溺れて政務をろくに行わなくなっていました。

神余のもとには、山下定包さだかねという悪賢い家臣がいて、玉梓たまづきは彼ともデキていました。定包さだかねは神余に政務を任されて強い権力を持つており、勝手に民から税金を搾

り取り、とても強く恨まれていました。

やがて、民の間から、定包さだかねを暗殺しようという動きさえ出てきました。定包さだかねは、これを知り、しかも領主の地位を乗っ取ってしまうという恐るべき計画をたてます。それは、領主に自分に似た格好をさせて外出させ、暗殺者にそちらを狙わせるといふのです。

定包さだかね「神余じんよさま、たまには外出して人々の様子を見てくるのはどうですか」

玉梓たまづき「お忍びで下々の様子を気遣う光弘みつひろさま、カツコ

イイ」

神余じんよ「そ、そうかな。エへへ」

玉梓たまづきが定包さだかねの計画をくわしく知っていたかは分かりませんが、話の中では、すくなくとも領主の外出をこんな感じでそそのかしていました。結局この作戦は成功してしまい、領主は暗殺者の手にかかって絶命、そしてこの「テロリスト」たちを一網打尽に捕らえて手柄を立てた定包さだかね自身が、次の領主に推薦されて、まると神余じんよの後釜におさまったのでした。玉梓たまづきは、恥も

外聞もお構いなしで、この新領主の正妻となりました。

このあとしばらく定包さだかね・玉梓たまづきは我が世の春を謳歌しますが、それは長くは続きませんでした。義兵を従えた里見義実よしざねが城に攻めてきたのです。

定包さだかねは、義実よしざね自身ではなく、自分の家臣の妻立つまたて（他一名）に殺されました。妻立つまたては、どうせ戦に負けるならと、主君の首を敵に差し出して命を長らえようとしたのです。また、手柄を褒められて、玉梓たまづきを自分の妻にできるといいな、という下心もあつたようです。もっとも、義実よしざねがそんなズルイ奴を許すはずがなく、妻立つまたては降伏後すぐに、義実よしざねを手伝っていた元家臣の金銃かなまり八郎に首をはねられました。

玉梓たまづきも、妻立つまたてと同様に、義実よしざねの前で裁かれます。はじめは、玉梓たまづきがあまりにしおらしく反省している様子なので、義実よしざねは思わず「許してもいいかもなあ」と口走ってしまいます。しかし、金銃かなまりがこれを厳しく諫めました。

金銃かなまり「許しちゃだめですよ、この女こそが諸悪の元凶だったんですから。見た目にだまされちゃあいけません

ん」

これを聞いて義実よしざねは反省し、玉梓たまづきはやつぱり死刑と
いうことに定められました。玉梓たまづきは、武士である義実よしざね
が簡単に前言を撤回したことに激しく怒りました。

玉梓たまづき「金鉢かなぼちめ許さない、せつかく許されかけた私の命
を奪うとは。そして里見義実よしざねよ、優柔不断のへボ武将
よ、お前も許さない。末代まで呪つてやる。お前の子
孫を、煩惱ぼんのうの犬にしてやる！」

玉梓たまづき自身はこの場で刑死しますが、彼女の霊は、こ
の後いくつかの形を取つて里見家を苦しめます。なに
より、八房やっふさという犬を里見家に送り込んだのが一番強
烈な呪いです。その経緯について、以下に説明します。

ある農民が飼っていた犬が、仔犬を産んだ直後にオ
オカミに襲われて死んでしまいます。母を失つて仔犬
もすぐ死ぬかと思われましたが、不思議なことに、一
頭のタヌキがときどきこの場に現れて、この仔犬に乳

を与えたため、奇跡的に犬は死にませんでした。

里見義実よしざねは、このウワサを聞いて、この仔犬を欲し
がりました。「狸たぬき」に育てられた犬という点が気に入っ
たのです。

義実よしざね「狸たぬきつて字には、『里』が入っている。この犬は、
里見の犬だ。すごく縁起がいい」

こうしてこの犬は「八房やっふさ」という名をつけられて里
見に飼われたのです。八房やっふさは、やがてとてつもない大
手柄をたてました。のちに里見は安西景連あにしげんと戦を起こ
すのですが、里見軍はいろいろ運が悪くて全滅寸前で
した。そのとき八房やっふさは、単身で敵地に飛び込み、敵将・
安西のクビを食いちぎつて、大逆転勝利をもたらした
のです。

これだけなら八房やっふさは「チヨ一有能な犬」で終わり、
なんの呪いでもありません。しかし、どうして八房やっふさ
が戦を手伝ったのが問題です。義実よしざねが、負け戦をどう
逆転させようか悩んでいたときに、つい軽口で、そば
にいた八房やっふさに「敵将のクビ食いちぎつてきてよ。そし

たら伏姫（義実の長女）をあげるからさあ」と言ったのです。八房は、これを聞いて奮起し、非常識なほどの力を發揮したのでした。

当然、戦に勝ったあと、義実は「あの約束は冗談だから…」と渋りました。しかし、伏姫自身が「一国の領主は、一度口に出した約束を絶対に破ってはいけなし」と主張し、八房とともに屋敷を出て行ってしまったのです。

玉梓が「子孫を犬にしてやる」と言ったのが、まさに現実となってしまったのです。

なんとというおぞましい展開… といったところで、実際は伏姫が文字通りの意味で犬の子を産むといったことはありません。伏姫は高い徳の力によって八房を教化し、彼にとりついた玉梓の呪いの力を浄化してしまいました。

ただし、伏姫は、浄化された八房の魂と「気の交わり」をかわしてしまい、意図せずして何かを「妊娠」してしまいます。伏姫は悩みぬき、彼女を助けにきた金鉢や義実の目の前で、身の潔白を証明するために、みずからの腹を裂いて死んでしまいました。

その傷口からは白い気が立ちのぼり、玉となって、流星のように関東じゅうに散らばっていきました。これがのちに、八人のヒーローに姿を変えて里見家に集結するというわけです。

玉梓の呪いは、伏姫の死によってある意味成就したとも言えますが、生まれた「犬の子」は、のちに里見を救うヒーローでもあるわけで、この意味では一概に「呪い」と呼ぶわけにもいかなかった気もします。こちらへの絶妙さが、里見八犬伝を奥深いストーリーにしている… と、筆者は思います。

ところで、玉梓の呪いは、仔犬に乳をやったタヌキのほうにも実は入り込んでいました。こちら側の説明は、「妙椿」の回でより詳しく説明します。

■ 亀篠

亀篠は、大塚匠作の娘で、大塚番作の姉にあたります。匠作が結城合戦に参加して留守にしている間、武蔵国にある大塚の莊園（大塚村）に母と二人で暮らししていたのですが、もともと彼女は素行が良くなく、不良だった臺六という男といつも遊んでいました。

結城合戦のあと、番作は大ケガを負い、信濃の温泉地でしばらく療養していました。大塚村では、その間に、亀篠は臺六と結婚して好き勝手に振る舞っていたのです。結婚といたって、親の許しをうけていたのではなく、病気で寝たきりの母を孤独死同然に放つておいて、自分たちだけの決定で行った結婚です。

それだけではなく、勝手に匠作・番作が死んだことにして、自分たち夫婦が村の莊官（村長みたいなもの）の職を引き継いでいました。（臺六が、自分は結城合戦で活躍した大塚匠作の婿である、とお上に訴えたのです。足利成氏が旧臣優遇キャンペーンを行っているのに便乗した形です）

番作は、戦地で得た妻の手束といっしょに大塚村に帰ってきました。亀篠（と臺六）はこの夫婦とすぐに緊張関係に陥ります。そりゃそうですね、匠作の息子として亀篠たちの地位につく資格を持つのは、本来、番作のほうなのですから。

ただし、番作は実際には莊官の地位に執着があるわけでもありませんから、その後、大塚という名字を犬塚に変えて、一般住民として大塚村に住み続けます。

村人により好かれたのは、亀篠たちよりも断然番作たちのほうです。亀篠はこれがかいかにも面白くありません。番作も亀篠たちを軽蔑していますから、互いにほとんど疎通のない、冷戦状態になりました。実は亀篠たちには番作たちに強硬的になれない理由があります。足利の家宝である名刀・村雨を番作が（匠作から受け継いで）持っていますから、家督をめぐる裁判でも起こされたらこちらが負けることが確実なのです。

番作たちのほうに先に子ができました。おなじみ、犬塚信乃です。彼は非常に優秀で、村人たちはよい

よ犬塚たちが好きになります。

亀篠たちはこれが悔しくてなりません。事情があつて信乃は女装して暮らしているのですが、これをバカにしてみても向こうにはコタえないようです。自分たちには子がなかつたのですが、どうしてもこれに対抗したくなり、隣の領地から養子をもらつてきました。これが浜路です。

亀篠・墓六「やーいやーい、こつちのほうがいい子だもんね。浜路はかわいいいなー」

まあ、亀篠たちの性格ですから、浜路を心から可愛がつたりすることはなく、人前ではこれ見よがしにしてみせて、裏では浜路につらくあたつていたようです。番作たちが犬（与四郎）を飼い始めると、今度はそれがうらやましくなつて、亀篠たちは猫を飼い出します。

亀篠・墓六「犬より断然ネコがカワイイもんね。ネコ最高（これ見よがし）」

この猫（紀二郎）は、与四郎のいる場所に転がり落ちて、噛み殺されてしまいました。

亀篠たちは激怒し、犬を罰するために身柄（？）を引き渡せ、と番作たちに迫りました。番作は「勝手に死地に飛び込んだのは猫のほうだから犬に罪はない。もし逆のことが起こつてもウチは恨まない」と答えま

す。
亀篠たちはこの番作からの返事を逆手に取り、犬をなんとかして自分たちの屋敷に導き入れて、そこで堂々と叩き殺してやろうと画策します。

亀篠たちのこの思惑は、結果的にうまくいきませんでした。信乃が、亀篠たちの怒りを晴らすような演技を犬にさせようとしたのですが、それが裏目に出て、犬は亀篠たちの屋敷にモロに飛び込んでしまったのです。犬はフルボッコにされ、半死半生になりました。

亀篠たちはさらにこの事件を利用して、番作から宝刀村雨を奪つてやろうとも試みます。彼女は、犬が屋敷に乱入してきたときに、足利の公文書が踏み破られてしまった、というウソをついて、番作を責めました。

亀篠「このままなら、たぶんお前たちは死刑ね。村雨を献上したら、たぶん罪を許してもらえるわよ」

番作は亀篠のウソを内心では見破っていました。これを逆に利用することにしました。自分の老い先がもう長くないことを番作は知っていましたから、彼はあえてこの責任を取るという形で切腹して死に、のちに残した信乃に有利な状況を作ったのです。これによつて、亀篠たちは道義的責任から信乃を養子として迎え入れ、村雨のことを柵上げにせざるを得なくなつたのです。

亀篠たちにとつては、表面上は信乃を養子としてかわいがりながら、裏では彼が受け継いだ村雨をなんとかして奪つてやろうという策をあれこれ試す日々が始まりました。信乃が村雨を持つて当局に訴えれば亀篠は負けるといふ状況は相変わらずなんですし、信乃は亀篠と墓六を、父を死なせた人たちとして嫌つていますからね。

信乃をかわいがるというのもあくまで表面的なもので、番作の持つていた財産はすぐに亀篠たちに取られてしまい、信乃自身の財産といえは、番作が直接信乃に残した数両の金と、例の村雨くらいなのでした。それでも信乃はなかなかしたたかに振る舞い、下人の額蔵とも仲良くなつてチームプレイをし、亀篠の思うようには村雨を手放しませんでした。

さて、村雨を奪うための時間的余裕もだんだんなくなつていきます。というよりも、信乃が別の意味で邪魔になつてきました。亀篠たちは最初、信乃を浜路の婚約者であると村人に公言したことがあります。番作が死んだことで村人たちは怒っていますから、それをなだめるといふ意図もありました。信乃を立派に育てるといふポーズを見せたかったのですね。

しかし、浜路を、大塚城陣代の簸上宮六が気に入りました。陣代が領地の視察に来たときに、サービスのとして浜路に酌をさせたのがキツカケです。ゴマスリ部下の軍手が陣代のことを付度し、浜路を妻によこすように亀篠たちに一方的に要求しました。

軍手「すでに婚約者がいることなど、何とでもやりようがあるだろう。金はたくさんやるから、よしなに取り計らえ」

亀篠たちは、これを受けて、信乃を秘かに亡き者にする計画をたてました。失敗すれば逆に身の破滅ですから、けっこう必死です。

具体的な作戦はこうです。信乃を川釣りに誘い出し、そこで事故を装って殺してしまおうのです。あらかじめ雇っておいたゴロツキの土太郎と墓六が協力して、信乃が川に飛び込む状況をつくり、そのあと二人がかりで組みついて溺れさせてしまおうことにしました。

信乃が思ったよりタフだったのでこの作戦自体は失敗しましたが… この作戦は二重底のものでした。信乃たちが川のなかでバタバタやっている間に、同じく亀篠に雇われていた左母二郎という浪人が、村雨の刀身部分だけを別の刀と入れ替えるという芸当をやつてのけ、これによってまんまと村雨の奪取に成功してしまいました。信乃はこれがもとで後に大ピンチに

陥ってしまうのですが、そちらの説明は今回の趣旨と離れるので省略します。

亀篠が左母二郎を利用したやり口は、かなりゲスです。左母二郎はそこその美男子で、音楽の教師として亀篠の屋敷に出入りがありました。浜路に気があり、亀篠ははじめ、こいつと浜路を結婚させてもいいなと思っていたようです。

しかし、陣代との結婚のほうが自分の身分をアゲることができませんから、亀篠はあつさり左母二郎を捨て、それどころか「村雨を奪ったら浜路と結婚させてあげる」とウソを言つて彼を協力させたのでした。

一方で、信乃と結婚する気だった浜路に突然これのキャンセルを知らせ、かわりに陣代と結婚するよう強要します。承知しなければ墓六は切腹させられる、とウソまで言つて、無理に承諾させました。(承諾させたというのは亀篠たちの勘違いで、このとき浜路は秘かに自殺の決意をしたんですけどね)

また、浜路との婚約をなかつたことにするために、

信乃を殺すための作戦その2も企画します。村雨を足利成氏に返す旅に出なさい、とそそのかし、下人の額蔵にはそれを追わせて、道の途中で暗殺するよう命じたのです。(ちなみに、額蔵への「褒美」も、浜路を妻にやることでした。) まあ、亀篠は気づきませんでした、額蔵は実際は信乃の味方ですので、これは実行されませんでした。

左母二郎は利用されたことをあとで知り、これを恨んで、ちょうど庭の松で首をくくろうとしていた浜路をさらって逃げてしまいました。この日はちようど陣代が浜路をもらいうけに来る日だったので、亀篠たちはパニックに陥ります。

浜路がない理由についてさんざん言い訳を並べたあげくに、迷惑料として信乃から奪っておいた村雨を渡すことで許されようとなりましたが、これもまた左母二郎によって準備されたニセモノでした。ついに彼女は、怒り狂った陣代と軍手によって、夫もろともなぶり殺しにされてしまったのでした。

こんな亀篠でしたが、彼女の殺された現場を発見した額蔵は、大塚家の下人として、即座に刀を抜いてカタキである陣代を斬り殺しました。また、彼女にいいめ抜かれていた信乃もあとでこれを聞いて悲しみ、彼自身は別の機会に、軍手を「叔母上のカタキ」と呼んで斬り殺しました。

額蔵は、のちに「義」の玉を持つ犬士、犬川莊助として活躍します。信乃もまた、「孝」の玉の男、大塚信乃として世に出ます。二人もの犬士の生い立ちに深い関わりを持つ人物、それがこの亀篠だったのでした。

■黒白

ほんのちよつとしか登場はしませんが、黒白も物語の中でわりと重要な役目を持った悪女です。

黒白は、犬山道節の父である道策の側室でした。当時、道策はふたりの側室(阿是非と黒白)をもっていました。正妻はいたのですが、子を産まないうちに死んでしまっていました。

道策はあるとき冗談で、「先に男の子を産んでくれ

たほうを、正式に後妻としよう」と言いました。その後、阿是非は男子を、黑白は女子を生みました。道策は約束を守りましたので、結果として後妻の座を勝ち得たのは阿是非です。

黑白はこれを妬みます。道策が留守のあいだに、阿是非を毒殺しました。また、6歳だった男の子も絞め殺してしまいました。死体はしばらく菩提寺に殮のために安置されました。

道策が出先から帰ってきたときはすでに事件から20日が経っていました。もちろん彼はおおいに悲しんだのですが、なんと、殮の場にあつた男の子はその後突然息を吹き返して大声で泣き始めました。(当時その子の乳母だった音音が水垢離をして祈ったかららしいですが、この話には今回は触れません)

男の子の証言によつて、犯人が黑白だったことがすぐにバレてしまい、彼女は斬首されてしまいました。また、彼女の子だった女の子は、一族との縁を切つて大塚村に養女に出されてしまいました。彼女の当時の名は正月、養女に出た先でつけられた名前が近路です。このときの6歳の男の子が、のちの犬山道節です。

殮から蘇つたときに、肩にあつた牡丹の形のアザが盛り上がつてコブになったのですが、あとでここから「忠」の玉が出てきます。

■ 船虫

南総里見八犬伝で一番有名な悪女といえ、玉梓なんかじゃなくてダンゼン船虫だと言う人がたくさんいます。玉梓は仮にも里見義実(よしみね)に恨みを持つ理由がありました。船虫には特にそういうエピソードは描かれていません。登場したところから、何の理由もなく筋金入りの悪人です。言うまでもありませんが、筆者は船虫が大好きです。

最初に船虫に会う犬士は犬田小文吾(いぬたこぶんご)。「悌」の玉の犬士)です。彼は、荒芽山の戦い(あらめやま)のあとで他の犬士たちとはぐれ、鳥越山の近く(とりこえ)を放浪していたときに、船虫の当時の夫である鷗尻並四郎(かみめしりなみしろう)という男の命を救いました。イノシシ狩りに失敗して命が危ないところに小文吾が現れて、この手負いのイノシシを殴り殺した

のです。

並四郎の正体は、旅人を自分の家に送り込んで、それを殺して金品を奪うということを稼業としている盗賊です。船虫は彼の妻としてそれを手伝う立場でした。小文吾はさつそく並四郎の家に案内されます。(並四郎自身は、あとで帰ってくると言いつ残していったんその場を離れますが。)

船虫は、ひとりで訪ねてきた小文吾を、夫の命の恩人として大げさに称えます。そして目いっぱいのもてなしをうけ、酒を飲ませ、やがて客間に案内されて小文吾は床につきました。

夜が更け、真つ暗になつた客間に、戻ってきた並四郎が忍び入り、布団の上から刀を突き刺します。しかし小文吾は、家の調度や船虫の態度が全体に自然なのを怪しんでいましたので、部屋の隅に隠れていて、逆に並四郎の首をはねて退治してしまいました。

当然、船虫も共犯に決まっていますのですが…彼女は小文吾の先手を打って、「おお並四郎がこんな悪人だったとは」と嘆いて泣き崩れました。

船虫「聞いてくださいお客様、私はもとは村長の娘だったのです。こんな不祥事が面に出て、家名を汚すのは耐えられない。夫は報いを受けました。どうか黙っていて」

小文吾は、船虫が悪人でないと言うのなら、もうそれでいいと許しました。

船虫「ありがとうございます。お詫びの品といつてはなんですが、先祖伝来の宝の尺八を差し上げますから、もらってください」

小文吾は、これをもらうフリだけして、こっそりこの家の物入れに押し込み直してから出て行きました。何やら怪しいと思つたので、機転を利かせたのですね。

実はこの尺八は、千葉の殿様から盗んだ盗品だったのです。船虫はこのあとすぐに役人に訴え出て、「夫を殺したのはあの男だ。ついでに、何か盗品っぽい尺八も持っていた」とウソを言いました。これで小文吾

が捕まり、罪人として処刑でもされてしまえば仕返しになると考えたのです。役人はこれを信じ、旅に戻った小文吾のあとを大勢で追いました。

道中に立ちほだかつた役人（と船虫）の目の前で、小文吾は手荷物を開き、尺八が入っていないことを示します。さらに「その尺八なら、この女が無理に私に押しつけようとしたんです。女の家の中に押し戻しましたから、そこにありますよ」と説明しました。

小文吾にまんまとやられて、船虫はその場で開き直ってヒステリックに暴れまくりましたが、ついに千葉の役人に捕らえられてしまいました。

これで船虫の話はおしまい… ということはありません。まだ序の口です。なんと船虫は、千葉の重臣である馬加大記に強力なコネがありました。かつて並四郎と一緒に、馬加の悪事を手伝ったことがあるのです。船虫が捕まったことを知った馬加は、昔の悪事が露見することを怖れました。それで、手下のチンピラを使って護送部隊を襲い、船虫をまんま

と逃がしてしまつたのです。

（ちなみに、その悪事というのは、馬加の城内での権力闘争に関わるものでした。この結果として、粟飯原胤度とその一族が皆殺しになりました。胤度は、犬士のひとり、犬阪毛野の父です）

このあと船虫はしばらく潜伏生活をしますが、次の話の中に復帰してきたときは、下野の赤岩一角という男の後妻におさまっていました。赤岩は、犬士のひとり、犬村大角の父です。つまり、船虫は大角の継母にあたる立場にいるのですね。

実はこの時点で、本物の赤岩一角は化け猫に食い殺されており、今一角の格好をしているのはその化け猫です。二セ一角は、次々と後妻を取ってはそれも食い殺していたのですが、あるときここに現れた船虫だけは、この二セ一角と妙に気が合い、うまく夫婦として暮らしているのです。船虫は単なる人間のはずなのに、心はずで妖怪級ということなのでしょう。

一角は大角を生かしておきたくないのですが、彼

は「礼」の玉に守られています。ですから、徹底的に
いじめて彼を遠ざけていました。船虫はこれに乗つか
る形で、同じく大角とその妻の雛衣をいじめました。
大角が義父から受け継いでいた財産も、いろいろと
ケチをつけながらみな奪ってしまいました。さらに、
雛衣が急に（大角の心当たりがないのに）お腹が大き
くなり、妊娠しているように見えてくると、一角と
船虫は、大角と雛衣の人間性を否定し、二人を離婚さ
せてしまいました。

こんな風に迫害しておきながら、ある日、船虫は
雛衣を連れて大角の独居する庵を訪ね、「雛衣と復縁
しなさい」と薦めます。

船虫「一角どのが、目にケガをしたのよ。回復祈願の
ために、ぜひ善行を積むべきだわ。今からでも遅くは
ない。雛衣の不貞のことは忘れ、復縁して幸せにおな
りなさい」

大角・雛衣「お母さま…（感激）」

実はこれは、後に二セ一角が大角たちに突きつける

「とんでもない要求」のための布石でした。一角は別
の日に船虫・我二郎（息子）をつれて庵に現れ、雛衣
たちに、「ひとつ親孝行をしてくれ。お前たちの大事
なモノを私にくれ」と頼みます。

一角「ここで腹を裂き、雛衣の胎児を私にくれ。私の
目のケガを癒す薬を、それを使ってつくることができ
る」

大角「そんなムチャな！」

船虫「（優しい顔で）よかったわねお前たち、これぞ
究極の親孝行ですよ」

大角にとって親孝行は何よりも重要なことではあり
ますが、今回ばかりはやすやすと承諾できません。脂
汗を流して悩みぬく大角を横目に、雛衣は「わかりま
した」と言って死ぬ覚悟をきめてしまいました。シヨツ
クを受ける大角。ニヤニヤ笑って雛衣の自害を見守る
一角ファミリィ。そしてついに、雛衣は自らの腹に刃
をグサリと差し込み、切り開いたのですが… そのと
き、できた傷から「礼」の玉がすさまじい勢いで飛び

出して、それは一角に当たつて致命傷を与えました。
(雛衣は、以前、この玉をあやまつて飲み込んでしまつていた
のでした)

船虫は激怒し、自分自身の懐刀を取り出して猛烈に
大角に襲い掛かるのですが、この一部始終を隠れてみ
ていた犬飼現八(「信」の玉の犬士)が現れ、船虫を
投げ飛ばして失神させました。ニセ一角はこうして退
治され、船虫も「バケモノを手伝つた女」として捕ま
つてしまいました。

しかし、大角は、即座に船虫を殺しません。「この
女が雛衣を死なせたカタキというわけではない。彼女
はしかるべき手続きで裁判を受け、罪を償えばよい」と
言つて、船虫の身柄を、一角のもとを訪ねていた
籠山という男に預けただけでした。籠山は彼女を上野
の白井城まで護送する約束をし、去つていきました。

船虫は、護送中に、この籠山もまんまと手玉にとつ
て、再び逃げてしまいました。籠山に「あんた、私の
はじめての夫に顔が似ているわ」と言い寄つて誘惑
し、その気になつた彼を朝までかけて絞りつくしたの
ち、疲れ果てて眠りこける籠山を後目に、悠々と去つ

たのでした。

逃亡中の船虫は、今度は越後のあたりで酒顛二とい
う盗賊と出会い、夫婦になりました。船虫の金品を奪
おうとして襲いかかった酒顛二を相手に船虫は果敢に
戦い、彼はそこに感心したのです。時々、船虫のガツ
ツはすごいなと思つますね。

ここで船虫は、新しい夫と一緒に盗賊稼業をエン
ジョイします。たまたま、小文吾の供をしていた磯九
郎もそのターゲットになりました。船虫は、雪ででき
た穴にはまつて困つているフリをして磯九郎を道端に
呼び入れると、夫と協力して彼を殺し、運んでいた金
品を奪いました。

磯九郎が運んでいた銭と反物は、小文吾が牛相撲の
神事で活躍した礼としてもらったものです。船虫は
小文吾が近くにいることをすでに知つており、いよいよ
次のターゲットを小文吾に決めました。小文吾は目
の病気で動きが不自由になつており、船虫にとつては
昔の恨みを晴らす大きなチャンスでもあつたのです。

船虫はマッサージ師に扮して小文吾に近づきまし

た。眼病にはマッサージが効く、という考えがあったので、たまたまその技術で人気を博していた船虫が呼ばれたのです。そうしていよいよ、無防備な小文吾の背中に刀を突き立てる寸前まで行ったのですが：

小文吾の持っていた「玉」が警告を発し、船虫は寸前で小文吾に刃を避けられたため、作戦は結局失敗、彼女は再び捕まってしまうました。そして、小文吾の友人たちによつて、庚申堂に三日三晩吊されるといふ拷問を受けました。

船虫の悪運はまだ尽きません。たまたま夜中にそこを通りがかった犬川莊助に「自分は無実の罪でここに吊されている」とウソをついて同情を誘い、ここから助けてもらうことができました。彼女は礼と称して莊助を酒顛二たちのアジトに案内し、彼を泊めて、そして殺そうとします。命の恩人を「カモ」としか考えないあたり、船虫の悪人ぶりはもはや超人級です。しかし、莊助もまた、「玉」の力で船虫たちのたくらみを知り、とつとと家を抜け出して逃げてしまいました。詳細は省きますが、結局、小文吾と莊助は、このアジトを壊滅させます。酒顛二をはじめ、盗賊団のほと

んどは死ぬか捕まるかしました。船虫と媪内という男だけがこのアジトから逃げていきました。

媪内が鉄砲を持っていたので、その後、この二人は流れ流れて、やがて武蔵の司馬浜というところで、道行く人を殺して金品を奪う生活を再びはじめました。船虫が辻君を装って客を引き、口を吸わせている途中で舌を噛みちぎって殺すのです。失敗しそうなったときは、媪内が鉄砲で撃つなどしてフオロします。こんな感じで、凄まじくも、落ちぶれた暮らしを続けました。

これを再び小文吾が発見します。今回は、他の5人の犬士（信乃・莊助・道節・大角・現八）もいっしょに連れていきます。みな、それぞれ何らかの形で船虫（または媪内）に恨みを持っていました。たちまち船虫と媪内は捕らえられました。

船虫は、命だけは助けてくれ、と最後の嘆願をします。特に、一番優しそうで、一時は親子の縁を持っていたこともある大角に狙いを定め、哀れんでくれ、助けてくれ、と泣き落としにかかりましたが…

大角「だまれ悪婦が！ 他の皆が許すとしても、ワタシだけはお前を許さんぞ！」
船虫「ひいっ！」

大角が、妻の雛衣が死んだ恨みを許すはずがないですね。あえなく船虫（と媪内）はこの場で犬士たちに処刑されてしまったのでした。たまたま媪内が牛を盗んできた途中だったので、この牛の角で突き殺させる、という残酷な方法で二人は命を絶たれてしまいました。

道節「人の手で直接手を下すのさえ汚らわしいからな」

この場所がたまたま閻魔堂の前だったので、犬士たちが去ったあと、木に縛られて腹に穴を空けて絶命している二人の死体を村人が見つけたとき、「閻魔様がこの二人を罰したのだ」とウワサになりました。ちゃんと、今までどんな悪事してきたのが、二人の背中に（信乃たちによって）書きつけられていましたの

で、神罰らしさがアップしたんですね。

さらにそのあと、この二人のクビは別の場所にちゃんと晒されなりました。関東管領の部下が、いろいろと世間の目をごまかす必要があつて、この「閻魔伝説」を利用したのです。期せずして、船虫は今までの悪事をきれいにリストアップされ、世の人々に「悪には報いがある」という事実をありありと示すことになったのでした。

それぞれの悪事の詳細は、ぜひ原作かそれに近いもので確認してもらいたいところです。繰り返しますが、筆者は彼女のキャラが大好きです。無限のガッツで世の中を呪い続ける女、八犬伝随一の悪女船虫よ、（ある意味）永遠なれ！

■夏引

夏引は、甲斐のある村の村長、木工作の妻（後妻ですが）です。木工作には実の子はいませんが、前妻といっしょだったころ、木の上に置き去りにされた幼女

を見つけ、彼女を実の子のように育てました。実はこの子こそは、かつて大鷲にさらわれて行方不明になった安房国主・里見義成の五女、浜路姫（大塚の浜路とは別人ですよ）なのですが、彼らはそんなことは知りません。

夏引は、甲斐国主の家臣、泡雪と不倫関係にありましたが、夫の目を盗んでときどき淡雪に会うのですが、浜路がいるのは何かと邪魔だし、普段から彼女を嫌って厳しい態度を取っていました。このころ、旅の途中の犬塚信乃が、木工作に気に入られて、しばらくここに滞在することになりました。夏引は信乃にはそれなりに愛想を見せますが、いよいよ泡雪との密会が難しくなったので、浜路への八つ当たりは増えました。

ある日、木工作が泡雪と口論し、怒った泡雪によって射殺されるという事件が起きました。口論の原因は、浜路を国主の側室として紹介したいという泡雪と、浜路は信乃と結婚させるのだという木工作の衝突です。浜路が家の外に片付けば泡雪と夏引は密会しやすくなりますから、そこらへんからこの泡雪のアイデアは出てきたのですね。

ともあれ、自分の屋敷内で木工作をアトサキ考えずに殺してしまい、泡雪はこの処分に困ります。そこで、泡雪は夏引をこっそり無人の寺に呼んで、この罪を信乃になすりつけてしまうための密談をしました。夏引は、夫が死んでなお、泡雪のこのたくらみに積極的に協力します。

泡雪「そっちの家の庭に死体を埋めなおしておこうよ。数日後に見つかるくらいの加減で。信乃がやったばく見えるように、物証の準備はよろしくね。ほどぼりが冷めたところに、お前と正式に結婚してやるよ。その後、浜路は遊女にでも売っちゃおう」
夏引「わかったわ。あんたは天才ね」

夏引は帰るとさっそく、下人の出来介を使って信乃の刀にニワトリの血をつけておきました。

夏引「話を手っ取り早くするためのこの工作よ。信乃がやったことは確実なんですから。これがうまくいったら浜路と結婚させてあげるわよ」

出来介「本当スカ！ がんばります！」

こうして、やがて木工作の死体が計画どおりに家の裏庭で見つかり、信乃の刀も血で汚れていることが判明したため、信乃は容疑者として甲斐国主の代官に逮捕されてしまいました。

ここまで夏引の計画通り：とりたいところですが、そうはいきませんでした。信乃を逮捕して連れ去った代官は、実は、犬山道節の変装した姿だったのです。夏引と泡雪の密談は寺の小坊主がたまたま立ち聞きしており、それはすでに道節たちに伝わっていたのです。道節は、信乃が陥られようとしていることを知り、こんな計画を使ってまんまと信乃を救ったというわけです。

道節たちが去ったあと、本物の代官が来ました。彼は、刀についていた血が新しすぎることや、死体の傷跡が刀でなく銃でつけられたことにすぐ気づき、夏引と出来介をむしろ殺人の容疑で逮捕しました。

夏引は拷問のすえ、今までの悪事をすべて白状させられ、死刑となってしまうました。木工作殺しには直

接関与していなくても、その直接の加害者と共謀して二セの犯人をつくらうとしたのが、死に値する重罪とみなされたというわけです。出来介のほうは百叩き十領外追放で済み、その後、別の場面で別の悪事をするんですが、今回の話からは逸れますので省略します。

夏引はその後、里見家に戻った浜路姫を怖がらせる幽霊として、名前だけ出てきます。まあこれは、本当に夏引だったわけじゃなくて、妙椿が適当に言っただけですけどね。

■ 嗚呼善

嗚呼善は、次団太という男の後妻です。家の手伝いとしてもともと雇っていた女でしたが、次団太の妻は彼女のことを親身に可愛がっていましたが、彼女が死んだあと、次団太は嗚呼善の「一生恩返ししたい」という願いを受け入れる形で後妻にとりました。

しかし嗚呼善は、次団太を裏切り、彼の内弟子である土丈二という男と不倫関係になりました。これが

ある日次団太にバシて、土丈二はボコボコに殴られ、嗚呼善は泣いて謝つてようやく許されました。

嗚呼善は許されて感謝するどころか、これを逆恨みして、次団太に仕返しをします。マタタビ丸という刀（船虫が小文吾を刺そうとした刀です）はもともと越後の領主の宝だったのですが、これを盗んだのは次団太だ、とウソの密告をしたのです。刀は確かにそこにあつたので、次団太は弁明も許されずに逮捕され、拘留・拷問を受けました。その後、邪魔者を追い出した嗚呼善と土丈二は、好き放題に「腐りあつて」楽しみ、次団太を見殺し同然に扱いました。

もうひとりの内弟子の鮎三や犬土（主に大阪毛野）が奔走したおかげで、最終的に次団太は誤解を解くことができ、長い拘留からようやく釈放されました。次団太が自分の土地に帰る途中、偶然にも、嗚呼善と土丈二に出会うことができました。同じ場所に宿りしていたのです。次団太は彼らの裏切りを許さず、ぶんなぐり、刀で切り捨てたのちに、二人まとめて串刺しにしてしまいました。そしてそのまま領地を出て行きました。

後に嗚呼善と土丈二の死体が発見されましたが、これを扱った役人は次団太の件にも詳しくはたつたですから、事情を察してこれを事件にしませんでした。

役人「まあ、あれ（次団太）の恨みも分かるからなあ。これはこれでいっか」

■ 妙椿

物語後半に出てくるメイン悪女、八百比丘尼こと妙椿です。妙真と名前が紛らわしいので注意しましょう。妙真は小文吾の義理の母のほうですよ。

彼女ははじめ、行脚をする尼さんの格好をして、上総の館山で城主をしていた墓田素藤のもとに現れます。素藤は盗賊出身なのですが、いろいろあつたのちに館山城主の地位に納まったという人物です。

彼は、側室にしていた朝貌と夕顔が急死したことを悲しんでいました。妙椿が「死者をよみがえらす」というウワサを聞いて、半信半疑で彼女を召し寄せてみたところ、妙椿は死者の面影を煙の中に浮かべてみせ

るといふサービスを扱っているのだといひます。素藤は、それでもよいから、と、愛する側室たちの姿を今一度見せてくれるように妙椿に頼みます。妙椿は反魂香を焚いて、一人の美女の姿をモヤモヤと目の前に浮かべました。

素藤「あれつ、こいつは朝貌でも夕顔でもない。しかし、それらがどうでもよく思えるほどの美人だ」
妙椿「ホホホ、どうせなら、この世に生きている娘のほうがいいでしょう。彼女の名は浜路。安房里見家の五女ですよ。あなたの地位なら、結婚を申し込んでもいいんじゃないかしら」

素藤は喜んで、さつそく里見に使役を送り、浜路姫に求婚しました。しかし、いきなり五女を嫁に出すのは微妙、などの理由で、結局は重臣会議で却下されてしまひます。

素藤はこれに怒り、里見の御曹司であつた義道を誘拐して人質とし、浜路をよこすよう強硬的に迫りました。当然、里見は素藤を討伐するために軍を送ります。

こうして戦がはじまつてしまひました。

義道をさらうときには、妙椿が二セの手紙で里見軍をかく乱したり、地下トンネルを出現させたりなどして素藤を助けていたのでした。ともあれ、人質がいるため里見軍は容易に突撃できず、戦は素藤に有利に進みました。

そのとき、今まで行方不明だつた最後の犬士、「仁」の玉の男である大江親兵衛が突如として現われ、戦局をあつけなくひっくり返してしまひます。単身で館山城に乗り込んできた親兵衛をだれも抑えることができず、素藤は抵抗むなしく捕らえられてしまひました。(妙椿は、親兵衛が出てきたあたりから一切素藤たちの前に姿を見せていません。親兵衛のことが怖いようです)

こうして、妙椿がそのかすこと起こつた「素藤の乱」の初戦は素藤の敗北で終わりました。彼はかろうじて死刑を免れ、領外追放となります。しかしすぐ、彼は妙椿と再会することができました。川縁の小舟の上で眠つてゐるうちに、妙椿の術によつて、彼女の隠れ住む庵のそばに呼び寄せられたのです。

素藤「あれっ、ここはどこだ。なんで妙椿がここに
いるんだ。ていうか、どうして戦をロクに手伝つてくれ
なかつたんだ」

妙椿「あの親兵衛は、私にとって厄介な男なのよ。次
はあの男を遠ざける工夫をして、それからリベンジ戦
をしましょ」

妙椿は、ふたたび素藤をはげまして、さらに里見と
戦わせようとなりました。あとで明らかになることで
す、妙椿がここまでして里見を恨むのには理由がある
のです。

実は、彼女の正体はタヌキです。しかも、八房が仔
犬だったときに、それに乳をやって育てたあのタヌキ
です。八房のほうは色々とチャホヤされましたが、そ
れを育てたタヌキのほうは誰も気にとめませんでした
。その不遇を恨んでいたタヌキに、玉梓の怨念が取
り付いて、ひとりの妖術使いの姿になったのでした。

さて、リベンジ戦は、なかなかうまくいきません。
はじめに妙椿は、親兵衛をうまく安房から追い出して

しまう作戦を実行しました。まず、幽霊の格好になっ
て、夜な夜な、浜路姫の枕元に現れて彼女を怖がらせ
るのです。そして不眠症で衰弱させました。

次に、洲崎のあたりに役行者の格好で現れ、「浜路
姫をおびやかす霊は『仁』の玉を枕元に埋めることで
追い払えるであろう」と予言したのです。里見義成は
これを信じ、親兵衛から玉を借りて、浜路姫の枕元に
埋めました。親兵衛自身は、浜路姫の隣の部屋で当分
宿直することになりました。

ここまで準備してから、妙椿は、ある晩、義成に幻
を見せます。浜路姫の部屋から、親兵衛と親しげに語
らう声が聞こえるようにしたのです。また、浜路から
親兵衛あての恋文も発見させました（これも幻）。義
成は慌て、親兵衛を当分旅に出してしまうことにしま
した。

義成「あのままではいかん、とんでもない間違いを起
こしかねんわ」

こうしてまんまと親兵衛は追い払われ、素藤にとつ

て極めて有利な状況を作り出すことに成功したので
す。このスキに、妙椿はほとんど妖術を繰り出して、
たちまち素藤とその一味に館山城を奪還させてしま
いました。どんな妖術を使ったのか、具体的にひとつづ
つ挙げてみましょう。

まず、バラバラになっていた素藤の兵を、近くの山
の中に導いて、再起の時間がくるまで養っていました。
山にはなぜかカエルがたくさんいて、その兵たちはカ
エルを食べて生き延びていました。

次に、その兵たちに武器やヨロイを与えるために、
突風をあやつって、里見に没収されていた武器類を
奪い返しました。妙椿は饗襲の玉というアイテムを
持つており、これを使うと自由に風が起せるのです。
饗襲の玉はその後も里見軍を翻弄するのに活用されま
した。

館山城襲撃を執行する晩には、兵たちに夜目が利く
魔術をかけました。これによって、城内のかがり火を
みんな消しても、自分たちだけは相手の姿が見える
ようになり、戦いは非常に簡単になりました。当然、
素藤たちは館山城を守る里見軍を圧倒し、何人かの家

臣を捕虜にもしてしまいました。

こうして城を奪ったあとは、安房から追加で派遣さ
れてきた里見軍を相手に籠城戦をすることになりま
す。これも、妙椿が大活躍して、付けているスキを与え
ませんでした。

一度、素藤側でもミスをして、こちらの家臣が里見
軍の捕虜になってしまったことがありますが、妙椿は、
両軍でそれぞれ捕虜を返しあう約束をさせておいてか
ら、自分たちからだけはワラ人形を返すという手品を
仕掛け、まんまと敵をあざむいてみせたりもしました。
まことに妖術のデパート、妙椿がいる限り素藤はデ
カイツラをし続けることができ、里見は地方の反乱ひ
とつ抑えられないヘタレの悪評を拭えずに国を弱らせ
ていくだけのように思われました。

しかしそれも、親兵衛が戻ってくるまでの短い期間
に過ぎませんでした。

里見を陰から見守っていた伏姫の霊の助けにより、
義成は親兵衛への誤解を解きました。親兵衛は、放浪

先で出会った仲間たちを引き連れて上総の戦線に戻ってきます。途中で出会った政木狐まさきこねという九尾の妖狐に、バツチリと妙椿みょうちん攻略法も教わってきました。

親兵衛は、政木狐に教わった館山城への秘密の入り口を使って、いきなり城の中心部に現れると、素藤もとむすと妙椿みょうちんの眠る高殿たかどのの最上階まで駆け上がりました。

親兵衛「(パンと屏風を開いて) 素藤もとむすイッ」

素藤・妙椿「ギャア——ッ!!」

親兵衛は、素藤もとむすを床に叩きつけてグツタリさせると、窓から外に飛び出そうとする妙椿みょうちんの胸ぐらをつかんで壁に押しつけ、懐から取り出した「仁」の玉を眼前にかざして見せました。玉から放射される光線に全身を貫かれて、妙椿みょうちんはゲツと叫んだきり、力を失って外から地面に落ちていきました。

妙椿みょうちんの弱点は、他ならぬ「仁」の玉そのものだったのですね。だから今まで、親兵衛にはまともに向き合わず、妙椿みょうちんは彼の前に姿を見せなかったというわけです。

妙椿みょうちんは地面に落ちると、もとのタヌキの姿に戻って死んでしまいました。その際、背中の毛皮には「如是によぜ畜生ちくしよ発菩提心ほつぼだいしん」という文字が焼き付いていたそうです。

戦勝の知らせとともに妙椿みょうちんの正体を知らされた里見義実は、八房を育てたタヌキのことを全然構わなかったことを反省し、このタヌキの革けで華鬘けまん(仏具の一種)を作らせましたとき。

■ 於お兔子とこ

於お兔子とこは、巽たつみという男の妻です。もともとはある領主につかえる家臣の妻でしたが、別の家臣だった巽たつみと不倫関係になり、ふたりは駆け落ちしたのです。

逃げてたどり着いた土地で二人は貧しさに困窮しますが、たまたま仕事を与えて助けてくれた絵馬売りの老人のおかげで、二人はなんとかやっていくことができました。

巽たつみと於お兔子とこは、それでもこの老人への恩を簡単に忘れました。店の手伝いをしながら時々金をちよろまか

したりして、不真面目にやっています。老人はそんなことには気づかず、やがて老いて死ぬ直前に、巽を正式に養子に指定して財産を譲りました。ここまでしてくれた老人の墓に、巽と於兔子は一度も参りませんでした。

巽たちは絵馬を描いて売り、それなりに余裕のある暮らしができるようになっていたのですが、ある日、巽の目が見えなくなりました。どうやら仏罰のようです。稼ぎがなくなり、借金がふくらんでいきます。

巽「オレ達の今までの極道暮らしが報いを受けたんだ。今日から心を入れ替えよう。酒も断つし、お前と共寝もしないことにする」

於兔子「おお、あなた。ワタシもそうするわ」

こう決意して以来、巽と於兔子は養父の墓参りを欠かさず、一日中念仏をとなえて暮らすようになりました。見違えるような生活態度の変化に、まわりの村人からも尊敬されるようになり、ついに巽の目もふたたび見えるようになりました。

こうして二人は商売を再開でき、穏やかな余生を送ることができました。と言いたいところですが、もういきません。於兔子の嫉妬グセによって、この生活は壊れてしまうのです。

発端は、巽の前にとつぜん現れた謎の美少年です。実は彼は仏の使いで、巽に仏画の技術を授けようとして来たのでした。長年の信心生活が評価されたのです。

美少年は、於兔子がバイトに外に出ているときに限って店を訪ねては、巽に絵を教えました。巽の画力はめきめきと上達して、当代随一の絵師として名声をほしいままにするのも目前に思われました。

しかし、ある日、たまたま店から出て行く美少年の姿を目撃した於兔子が、巽が浮気をしているのだと早とちりして、狂気のごとく怒りました。

於兔子「ワタシとの共寝を絶つておいて、あの少年とエロいことしてたのね！ 許せない、アンタを殺してワタシも死ぬわ！」

巽「誤解だつてば。落ち着けよ」

近所の木こりがこの二人のケンカを仲裁してくれました。その猟師のアドバイスによると、生活がストイック過ぎてストレスがたまったのが原因だと言います。

木こり「無理な生活はいけねえ。おまえさんたち、ほ、ど、ど、どに、楽しんでおもしろいことじゃなよ」
巽・於兔子「そ、そうか、ほ、ど、ど、どになら楽しんでもいいのかも……」

この日以来、二人の生活はほ、ど、ど、どころかすつかり自堕落なものに戻ってしまいました。リバウンドです。巽は例の美少年から絵馬をひとつ受注していたのですが、これを仕上げることもしませんでした。

それどころか、於兔子は例の美少年を夫のそばから引き離してしまおうと考えました。彼女は例の木こりにこれを相談します。

木こり「ワシの考えでは、あれは狐じゃ。絵を教えるなどといって、巽を化かしに来ただけじゃよ。なんな

ら今度、撃ち殺してやろうか」
於兔子「なるほど、お願いするわ」

こうして木こりは巽の家のそばに張り込んで、例の美少年が現れるのを毎日待ちました。ある日の夕方、ついに、巽の家から出て去って行く少年の姿を確認して（ちなみにこのとき、この少年は巽に絶縁を宣言しに来ていたのです。墮落したことにあきれたんですね）、これに狙いを定めてダンと撃ちました。

木こりが手応えを感じて獲物に駆け寄り、この正体を確かめてみると……血だらけで倒れているのは、ちようどバイトから帰ってきた於兔子その人でした。於兔子に下された最終的な仏罰はこのようなものでした。

こののち、巽はこの木こりを殺して逃亡生活に入り、やがて、虎の絵から本物の虎が飛び出すという事件に巻き込まれていくのですが、この話はぜひ本編で読んでください。大江親兵衛がこれに絡んできますよ。

■中婦君

この人は里見八犬伝に出てくるキャラではありません。椿説弓張月のほうです。なんとなくオマケでこの人のことも書いておこうかなと思いました。「弓張月」の悪女キャラはこの人だけです。海棠とか阿公とかいたでしょう、って？ 海棠は単なる朦朧のリモコンですし、阿公はちゃんと最後に懺悔しているんだから、悪女とは言いにくいんじゃないかなあ)

中婦君は、琉球25代国王、尚寧王の王妃です。最初、尚寧王の王妃になる予定だったのは廉夫人だったので、彼の娘であった中婦君が結局王妃になったのです。廉夫人は第二王妃になりました。

王と廉夫人の間には、寧王女という娘がいました。しかし、中婦君との間にはなかなか子ができません。このままでは、次期国王として寧王女が指名されることになってしまいますから、中婦君はこれを深く妬んでいました。

王はことあるごとに「寧王女に次の王を任せたいなあ」と口にするのですが、利射の息子で現在の有力者である利勇は中婦君と通じていて、「まだ決めるには早うございます、まだまだ中婦君は子を産めるお年です」としきりに王を諫めるのでした。

王「でも、ワシもいつまで健康でいるか分からんぞ。暫定でもよいから、寧王女を正式に跡継ぎに指名しておきたい」

利勇「およろください、もしも中婦君があとで男の子を産んだらどうします。余計なもめごとのもとでございましょう。第一、女性が王になるなんて無理です」

それでもついに、王は次期国王として寧王女を指名してしまいました。王にちゃんと正しい判断をうながす家臣もいたのです。王は寧王女に、王の印として琉球に伝わる宝の玉を引き渡す儀式をしました。

この直後に、琉球の海は天変地異のような大嵐を受け、民の暮らしに大きなダメージを与えました。利勇は、これは王の誤った決断に神が怒っているのだとい

います。

利勇「ほら、王女なんかを王に指名するから」

王「え、そうなの？ あれのせいなの？」

利勇「そうですとも。阿公くまぎみを呼び、神をなだめる方法を相談なさいませ」

阿公くまぎみは、巫女の長です。実は中婦君ちゆうぶきみ・利勇りゆう・阿公くまぎみはみんなグルで、みなで寧王女ねいわんによを追い落とそうとしているのです。神に祈つて嵐を呼んだのも、阿公くまぎみの仕業です。

阿公「神をなだめるには、辰の年、辰の月、辰の日に生まれた女子をイケニ工いけにこうにささげる必要があります」
王「げっ、それって、寧王女ねいわんによのことじゃねえか！」

巫女の預言という体裁をとって、寧王女ねいわんによを亡き者にしてしまおうという作戦なのです。まあ、これは色々あつて結局うまくいきませんでした。

細かいストーリーを説明する紙面がないのですが、

寧王女ねいわんによはその後もいろいろと迫害を受け、地位を失い、城を追われて逃亡の身になってしまいます。

この間に、中婦君ちゆうぶきみは、男の子を産むためのなりふり構わぬ努力を重ねます。いつそ尚寧王しやうねいわんとの子でなくてもバレなければ構わない、と考え、彼女はまず利勇りゆうと、そして次には国中のハンサムな若者たちと、取っかえ引っかえに子作りを試み、すべて失敗しました。

そしてついに、民間人の赤子を盗むことに決めました。阿公くまぎみに命令し、臨月の婦人を誰でもよいから定め、人気がないところでその腹を裂き、男子を奪ってくることにしたのです。阿公くまぎみはついに適当な女を探しだし、その命令を実行してしまつたのですが…これが誰の子だ、つたのか、それは今回の話から逸れるので省きます。面白いのでぜひ本編を読んでみてね。

尚寧王しやうねいわんは、この赤子を、自分と中婦君ちゆうぶきみのあいだに出来た子であると思ひ込み、大いに喜びました。そしてほとんど産屋うぶやを出たばかりのその子に、次期国王の指名を与えたのです。

家来をみな集めて華々しく行つた指名の儀式の真つ

最中： 王宮内に、琉球国の破滅の象徴である「わざわい」と呼ばれる獣が突如出現しました。虎の頭と牛の体をもつこの禍々まがまがしい獣は、まず王の前に飛び出して、この世のものと思えぬほどの恐ろしい声で吼えました。王は極度の恐怖によってシヨック死しました。

顔色を失って逃げようとする中婦君ちゆうふきみが、「わざわい」の次のターゲットでした。「わざわい」は、中婦君の片足を押さえつけ、もう片足に食いついて、めりめりと引き裂いて殺してしまったのでした。

■あとがき

以上、八犬伝（と弓張月）の悪女キャラを順番に紹介してみました。ひとりひとりの登場から退場シーンまでを追って、それぞれが独立したお話に見えるくらいになったら面白いかなあ、と思いながら始めましたが、その意図がうまく実現したかはよく分からないです。

この冊子を読んで興味を持ち、そのうち本物の南総里見八犬伝に挑戦してみようかな、くらいに思ってたさるなら、筆者にとつてはこれを書いた甲斐があるというものです。

『里見八犬伝のあらすじをまとめてみる』は、KADOKAWA 社の小説投稿サイト『カクヨム』で読めます。南総里見八犬伝の全編をダイジェストにしたものです。

<https://kakuyomu.jp/works/1177354054881101476>

同サイト上で、『椿説弓張月、読んだことある?』も公開中です。



『南総里見八犬伝 悪女コレクション』

発行日 2018.1.21

発行者 山本て

URL <https://kakuyomu.jp/users/yamatt3>